


早稲田大学大学院日本語教育研究科


2016年7月


博士学位申請論文審査報告書

論文題目：評価プロセスの多様性の共有による
待遇コミュニケーション教育に関する考察

申請者氏名：田所 希佳子

主査 川上 郁雄 署名 川上 郁雄 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 小宮 千鶴子 署名 小宮 千鶴子 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

副査 李 在鎬 署名 李 在鎬 
(大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学)

＜本論文の概要＞

本論文は、日本語教育における待遇コミュニケーション教育に評価プロセスという視点を取り入れ、初対面場面の会話者相互の評価プロセスを検討する自作映像教材を作成し、それを利用する実践を通じて、待遇コミュニケーション教育の理念の具現化と実践の可能性を切り開こうとした研究である。

本論文は全 240 ページで、序論の第 1 章から第 7 章で構成されている。申請者は、待遇コミュニケーション教育が敬語や表現を中心とする待遇研究とは異なり、コミュニケーション主体の場面認識に重点を置いた言語行為を考える教育であると捉える。したがって、待遇コミュニケーション教育の目的は、その時々場面における「コミュニケーション主体」、「場面」（人間関係と場）、「意識」「内容」「形式」の連動を相対的に認識する能力を高め、相互尊重に基づく自己表現と他者理解の能力を高めることであるという。申請者はこの視点にたつて待遇コミュニケーション教育の実践を考えるために、「評価プロセスの多様性の共有による待遇コミュニケーション教育」を構想し、その重要性と具体的な実践の方法について考察することを、本論文の主題とした（第 1 章）。

このような研究主題を探究するために、まず、申請者は待遇コミュニケーション教育と評価について先行研究をレビューし、一人ひとりの価値観を大切にする「タイプ論的発想」から、会話者の評価観や評価プロセスの背景にある価値観に注目することが述べられる（第 2 章）。

そのうえで、「日常生活における評価プロセスの多様性の共有に関する調査」として韓国語母語話者の日本への留学経験者を対象にインタビュー調査を行った。その調査ではスピーチレベルの選択に伴う評価プロセスに関する違和感やエピソードを具体的に収集し、留学経験者が自分の価値観に基づき、自分なりの暫定的な答えを見つけている実態を明らかにした（第 3 章）。

この調査で明らかになった実態を越えるために、申請者は「具体的経験」「内省的観察」「抽象的概念化」「能動的実験」の繰り返しによって学習するという経験学習理論をもとに、「評価プロセスの多様性の共有による待遇コミュニケーション教育の理念」について検討した。その理念のもと、学習者自身に経験させ、振り返りをもとに仮説を作り、実験させるという方法を導入する待遇コミュニケーション教育の実践を構想し、評価データを伴った自作の映像教材（日本人学生と留学生の寮の居住者による初

対面会話)を作成した(第4章)。

次に、この自作の映像教材を利用して、日本と香港の日本語学習者を対象に授業実践を行った。初対面会話における話題選択に関する授業実践(第5章)、初対面会話におけるスピーチレベルに関する授業実践(第6章)を実施した。それらの実践の中で映像教材を視聴した学習者が、コミュニケーション主体がなぜその場面でその話題を選択したのか、あるいは回避したのか、またどう解釈・評価したのかという過程や、なぜ初対面でも丁寧体を使う人と普通体を使う人がいるのか、相手はいかに受け取り、解釈・評価したのかといった人の評価プロセスの多様性を知ることが、学習者にとって自己の評価や価値観を振り返るきっかけとなることがわかった。

これらの実践の結果から、教室において「内省的観察」「抽象的概念化」をし、日常生活において「能動的実験」「具体的経験」を経て、再度「内省的的概念化」を行うということを繰り返すことによってコミュニケーションを認識する力を自律的に伸ばすことができ、そのことが相互に認め合いつつ自己表現する力を高めることができるとした。

結論(第7章)として、タイプ論的発想により、個人的評価、個人的評価プロセスに見られる、同一場面における評価プロセスの多様性を知ること、および場面における相対的な適切さを自らの価値観で判断する力を育てることが、待遇コミュニケーション教育において重要であることを主張した。

<本論文の評価>

1. 場面に対する学習者の認識を重視する待遇コミュニケーション教育では、学習者自身が場面における相対的な適切さを判断できるようになるための指導方法の難しさが問題となっている。その問題に対し本論文は、評価プロセスの多様性の共有という新たな教育方法を提案し、理論面から解説した後、日本語学習者と日本語母語話者の初対面会話における話題選択とスピーチレベルシフトの指導という二つの実践例を提示して、新たな教育方法の有効性を具体的に提示した点は高く評価できる。
2. 従来、初対面の相手には丁寧体もしくは同等の相手とは同等のスピーチレベルという傾向が先行研究において指摘されていたが、本研究は、初対面であっても普通体が現れている箇所注目し、その評価プロセスを明らかにした。そのことにより、同一のスピーチレベル使用場面であっても、スピーチレベルの背景にある場面認識

は多様であること、また、それに対する評価も多様であることを明らかにした。そのうえで、日常生活では共有されにくい、評価プロセスの多様性を明示し、それを利用して行う教育実践に教育的意義を見出した点が評価できる。

3. 本論文は、従来のテストを用いた特性論的評価を批判的観点で捉え、評価プロセスという新たな観点を取り入れている。この観点に立つ本研究は、学習者主導型の評価であり、同時に形成的評価に通じる評価の実践的研究として位置づけることができ、学習者の主体的な学びを支援するツールとして評価を利用している点において、日本語教育における評価研究全体の底上げにつながる研究として評価できる。
4. またコミュニケーション論や評価研究や経験学習モデルといった複数の理論的枠組みの接点を模索し、相互の有機的な関連付けを行っている点において、日本語教育に限らず、教育工学や認知科学などの関連分野に対する貢献も認められる。

以上の評価点があるが、課題もある。

1. 研究課題1「評価プロセスの多様性の共有による待遇コミュニケーション教育を行う重要性はどこにあるのか。」について、本論文では、5名の韓国人日本語学習者のスピーチレベルに関する経験や解釈を紹介し、学習者が互いの評価プロセスを知ることによって個人の経験を超えたより広い視野が生まれる可能性があるのではないだろうかと述べている。会話の評価プロセスを学習者たちが共有するという方法には、学習者個人の経験を超える可能性があると思われるが、同様の可能性をもつ他の方法との比較検討も必要ではないか。
2. 本論文で示された実践例は、いずれも初対面会話に関するものだが、初対面の相手の中にはその後には会わない人も多い。むしろ、日常よく接する人との関係をよりよく保つ会話における評価プロセスの研究も重要ではないか。
3. 本論文が主張する評価プロセスの多様性の共有による待遇コミュニケーション教育は、会話に対する学習者の主観的な認識を対象化する方法として優れているが、その到達目標の設定、例えば、会話参加者の認識の多様性が理解できるだけで良いのか、認識の多様性を通じて達成すべき地点があるのかどうかなど、検討すべき課題もあるのではないか。

<本論文の判定>

以上のような課題もあるが、本博士学位申請論文は、日本語教育学の博士号に値するものとして評価できる。